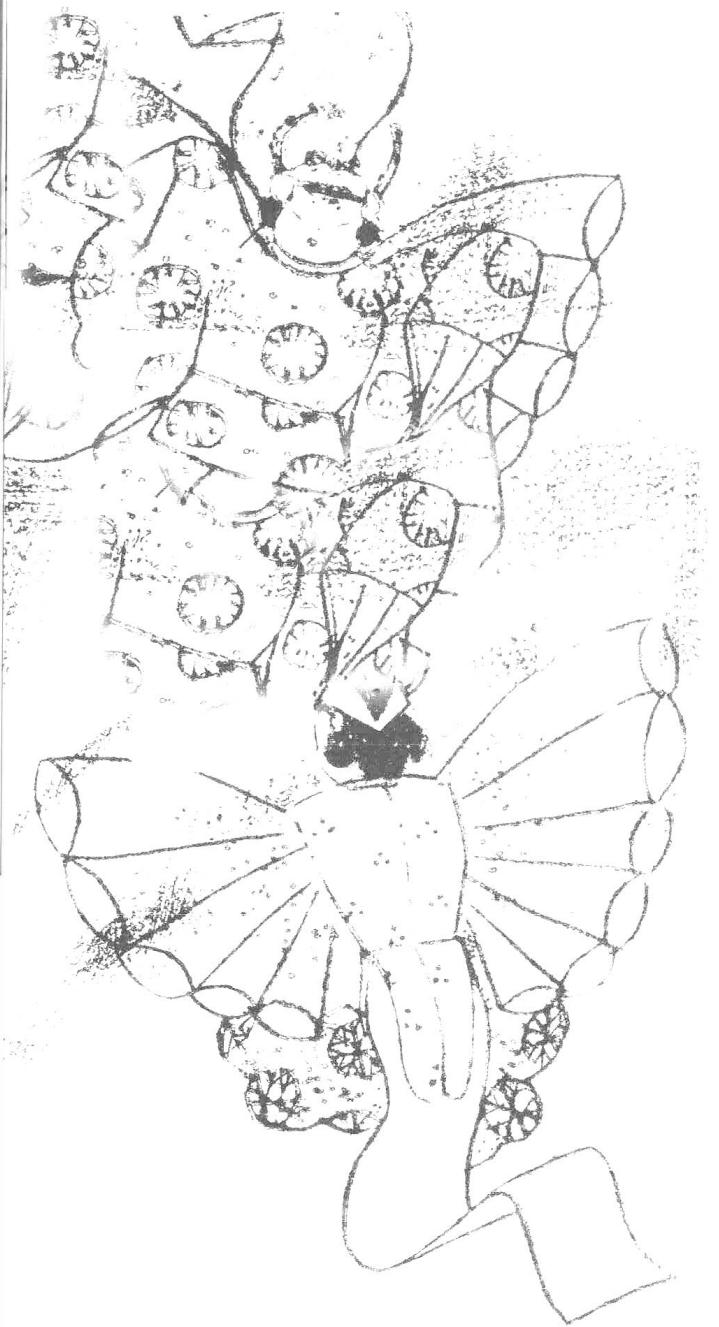
紫式部の娘 賢子

猪名の笹原かぜ吹けば

田中阿里子

猪名の笹原かぜ吹けば

田中阿里子



猪名の笹原かぜ吹けば　紫式部の娘　賢子

定　価　一三〇〇円
昭和六十一年六月四日　第一刷発行

著　者　田中阿里子
発行者　野間惟道
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話・東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
© Ariko Tanaka 1986. Printed in Japan
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
ISBN4-06-202729-1 (0) 〈文2〉

猪名(いな)の笹原かぜ吹けば

紫式部の娘　賢子

目次

序章　百人一首　5
第一章　二羽の蝶　7
第二章　髪洗い　26
第三章　光源氏　43
第四章　道草　62
第五章　みなし児　82
第六章　あこがれ　105
第七章　ほうき星　124
第八章　公達　140

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第九章　もののけ　161
第十章　御乳人　177
第十一章　歌合せ　192
第十二章　あきらめ　211
第十三章　禁色　229
第十四章　御日記　247
系図　266

装画　中島泰文
装幀　菊池千賀子

この作品は、京都新聞に昭和六十年五月一日より十一月十八日まで掲載されたものです。

序章　百人一首

紫式部といえば誰でも知っている王朝の女流作家であるが、その一人娘の賢子となると、知らない人が多いのでなかろうか。けれども小倉百人一首の中に、

有馬山猪名の笹原かぜ吹けばいでそよ人を忘れやはする

この歌があって、作者の大弐三位が賢子のことだといえば、たいていの人は「ああそうか」と思うだろう。

私は小学生の頃、百人一首がたいそう好きであった。正月には必ず親戚の家に集って、従兄妹たちとかるた取りの勝負を争ったが、有馬山の歌は「おはこ」の一つであった。

それにしても藤原定家という、和歌についての大変な目ききが選んだだけあって、小倉百人一首には名歌が多い。しかも百人のうち二十一人が女流歌人だというのも心強い話だ。だいたい源氏物語という世界的名品が紫式部の手になっている上に、和歌にもすぐれた作者が多かったということは、それだけで我々日本女性は鼻が高い。いや平安時代にあっては歌人の方が物語作者よりも評価が上で、純文学といえばやはり伝統の和歌であった。

ところで彼女らの名前を上げれば、古代の持統天皇からはじめて、平安朝に入ると小野小町があ

り、伊勢の御から右近に続くのである。だがそのあとに目ざましい時代がやってくる。

一条、三条、後一条、後朱雀、後冷泉天皇の間の約八十年というのは、かの有名な藤原道長が政権を担当して栄華をきわめ、そしてさらにその息子頼通と教通が、摂政や関白に任じられた時代だが、比較的政治事情は安定して文化がさかえた。驚いたことにこの間に活躍した女流歌人の作品が、百人一首には十一首も採用されている。右大将道綱の母、儀同三司の母、清少納言、紫式部、和泉式部、赤染衛門、伊勢大輔、小式部内侍、大弐三位、相模、周防内侍などの作品が目白押しである。しかもその作品の一つ一つが流麗、才気煥発であって、以後の院政期となると、とてもこれに及ばない。

念のために大弐三位賢子の歌の心をいえば、

「あなたは私がつれないとお恨みですけれど、私の心はあの有馬山の猪名の原にそよぐ風の音のようにゆれています。どうしてあなたを忘れることができましょうか」

第一章　二羽の蝶

長和二年の晩春である。午後の陽がのどやかに花の散ったあとの桜の木に照っている。桜の木はこの邸宅の東に附属する対屋の庭にあるのだが、その対屋の中でじっと手習いにはげんでいた賢子は、疲れた手をやすめた。ふと何かに誘われるように、重い衣裳と髪の毛をひいて立上ると、長い廊下を通りぬけて寝殿に入って行った。侍女がだれも追って来ないところをみると、昼寝でもしているのであろう。

今はこの邸の主人の藤原為時が、越後の国守になって赴任している。長男の惟規は越後で病死をしたし、長女は死に、次女の紫式部は宮仕えに出ているので、寝殿は誰も使っていない。しかし手入れのために侍女達が朝から格子を上げたとみえ、御簾までがまき上げてある。賢子が廂の間に足をふみいれると、外の陽気が奥深くまでなだれこんでいるのがわかった。

「今日は本当に気持がいいわ」

賢子はつぶやいて坐った。細い雨が二日間も降り続いてうっとうしかったのに、それが拭われたように爽やかである。賢子は無意識に縁の近くまでにじり進んだ。するとそこからは広い庭園がのこりなく見渡された。

土は表面がすっかり緑色の苔でおおわれて、やわらかい敷物のようである。その何枚かの敷物と敷物の間には白砂がしきつめてあって、さらに近くには前栽があった。前栽には植木のすきな女房の一人がうえておいた、三枝の花が少し咲きのこっている。そして苔の庭から続く平地の向うには、大池がある。

ところでこの寝殿には西側にまた対屋がついているのだが、その対屋からはまっすぐ池に向って透き廊下がのびている。廊下の先端は池につき出た四阿であって、それらの建物が重なるために、向うにあるはずの邸の西側の塀はかくれてみえない。しかし東の方には建物が何もないから、遥かに見通しがよく、まして外側には賀茂川の大きな川原があるので、眺望は広い。ただし川の土堤がこちらより少し高いので、塀ぎわには目かくし用の多くの木が植えてある。邸はすでに百年も前に造られたもので、木立も繁りすぎたから、まるでそのへんは深い森の趣きをなしている。

さらに池の向うの南には、蔵などの建物があるのだが、そこも築山の落葉樹がこみあって伸びている。もみじはいま葉がいっせいに芽ぶいて、それがまだ濃い緑色にはならず、薄緑や薄紅のこまやかな葉のままで、枝をさしかわしている。午後の光りが斜めにさしこむと、茂みの向うの建物はちょうど、御簾をへだてた風景のようにみえるのだった。

池に目を移した賢子は、

「あら、何かしら」

汀に近い植えこみに動くものをみとめて、じっとみつめた。

「揚羽蝶じゃないの」

思わず縁に身をのり出した。

揚羽蝶は植えこみの中のつつじの木に咲きはじめた花をもとめて来ているのだ。よくみると二羽が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かわりばんこに、あっちの花こっちの方と移りかわって蜜をすっている。薄水色と黒の縞模様のありふれた蝶だけれども、蜜を吸っている間にも羽つかいをやめようとしないせわしなさと、とび上ってからのゆったりした動きが二羽の蝶によってなされると、そのリズムがまるで楽器の二つの音色が織りなす調和のようで、賢子には面白かった。

「つがいかしら、友達かしら」

賢子は色々に想像した。やがて二羽の蝶はもつれ合いながら、広い池の上をとびこえて、南の雑木林にみえなくなってしまった。

「羨やましいこと。私にも羽根があればよいのに」

賢子は縁側の高欄にもたれてうっとりと空を眺めた。空には白雲が東と西に仲よく浮いていて、それも互いに言葉をかわし合っているようにみえる。雲にも心があるのかしら——言葉があるのかもしれないと思ってじっと耳を傾けていると、遠くからかすかな衣ずれの音がしてきた。

賢子は気がついて急いで縁から廂の間ににじり上った。彼女は何もしていませんという顔つきをこしらえて、小袿の衿もとをなおした。すると、思った通りに乳母の右京が急ぎ足に近づいて来た。

「姫さま、お探ししていたのにさっきからここにいらしたのですか」

「いいえ、今来たばかりよ」

「でも御簾は上げたままですし、これでは外からみえすぎます。縁にはお出にならなかったでしょうね」

「出ませんとも、ここから池のつつじをみていたのよ」

「本当に物騒ですからね、姫さまのお姿をそっと賀茂川の堤からみておいて、夜中にかどわかそうなんて男がいないとも限らないのですから」

「素敵じゃないの、在原業平が染殿の御后をさらって逃げた物語のように、そんな人がいたら」
「めっそうもない。卑しい男は身分の高い姫君をとらえると、衣裳をはいで姫はそのまま捨てて逃げるのです。内裏の中でさえ盗人が入るのはよくあることだと申しますからね」
「あなたは心配性ね、右京。だからそんなふうに髪の毛が白くなりはじめたのよ」
「私に心配をかけさせる姫さまがいけないのですよ。ほんとうに姫はとうに裳着（女子の成人式。十二、三歳で行なう）の式をすませて、一人前の大人でいらっしゃるのに、平気で子供のようなことをなさるんですから——。ここから外をおのぞきになる時も、ちゃんとお袖で顔をかくしておられたでしょうね」
右京は急いで御簾をおろしながら言った。
右京はずっと昔になくなった、母方の祖母の縁続きの女性である。その頃彼女の夫は右京職の下役人をしていたのが、流行の感冒で急になくなり、続いてまた一歳の女の子も同じ病気ではかなくなってしまった。そこで祖父の為時が、賢子の乳母にと彼女を懇望したのであった。
何といっても為時の妻だった人の縁につながる右京だから、それほど無教養ではなく、漢字こそ知らないが、物語などは好んで読んでいる。それに、七、八年前までは母の式部を育てた乳母が生きていて、姪の淡路もともにいた。右京はこの老女や淡路とも仲がよかったし、いわば主人の留守がちなこの家庭をとりしきって来たのが、老若ふたりの乳母だったともいえようか。それを思えばたしかに右京の髪が白くなりはじめた原因には、この家での苦労が数えられる。右京の年齢が母と比べて五歳ほどしか違わないのに、賢子にはこの頃祖母のように感じられていた。
賢子はこの右京が好きであった。苦労が多い多いとこぼしながらも、いっこうに未来を気にするふうでもないし、言いたいことは言ってしまうから、不満を残さずにいつも心は晴れている。それに言

いたいことを言っても自然にやさしさが働いて、言われた人を深く傷つけるようなこともなく、春の突風がさっと吹いた趣きである。母が穏やかな微笑と共に賢子を抱きよせて髪の毛をなでながら、「よい娘になりましたこと」とほめてくれるその眼の底に、鋭い批評の心を感じるとき、賢子はあとから必ず右京のふところにすがりついた。それが幼い頃からの習慣であった。

賢子は右京に促されて東の対屋に戻ると、中庭に面した西廂の自分の部屋におちついた。南側には屏風を立てて、母の部屋との仕切りにしてある。母が邸にいる時には、本を読んだりものを書いたりしている気配が絶えない。時々は夜ふかしをして、苦しそうに咳きこんでいる音が聞えることもある。賢子の方は夜はこの建物の奥の方に退いて、右京といっしょに寝るのだが、たまには母の夜ふかしの気配が気になって眠れぬこともある。だが今は隣室は静かであった。静かなばかりでなく、母が終日在宅のおりにはそのへんいっぱいに散らばっている原稿の紙が、さっぱりと片付けられて、本などは二基の厨子棚にきちんと積みかさねてある。たいてい六日に一度ほどは帰ってくるが、長びくと母は必ず手紙をよこして、留守中にこれこれの歌集を必ず暗記しておくようにとか、どの本をよみなさいとかの指示をしてくる。そのたびに賢子は厨子棚の本を出しに行くが、里下りの日が遠のくにつれて、棚にはうっすらと埃さえ積っていく。すると自分の心にも埃がたまるような気がする。賢子は屏風をあけてしばらく母の居室をのぞくと、また手習いの場所に戻った。

「姫さま」

右京が手に盆を捧げてあらわれた。

右京は白湯の入った椀と干柿を並べてすすめると、心配顔にまたたずねた。

「姫さまはさっき本当に、縁の方には出られなかったのですね」

「まあ疑い深いのね、あなたは」

「それならよろしいのですけれど」
右京がほっとしたようなので、賢子は嘘をついたのを少し気の毒に思う。
「なぜそんなふうに何度もいうの」
「実は今日は西の対屋にお客様があって、それでちょっと」
「そう、どなたかしら」
賢子も少し内心に不安を感じた。
西の対はずっと昔から、式部の従兄の伊祐(これすけ)がすみかにしていた。伊祐の父の為頼(ためより)と、式部の父の為時が兄弟だったからである。だが伊祐は若い頃は地方の国守の娘と結婚して、その邸へ通っていたし、子供達も妻のもとで養なわれていたから、めったに家族がこちらへ来ることはなかった。また伊祐の弟妹たちも、成長して次々にこの邸を出て行ったあとは、老いた為頼が静かに風流な生活を楽しんでいたのであった。
ただ、ある時期の何年間か――それはまだ賢子が物心つくかつかない頃だったが、自分とは五歳ほど年長の、美しい男の子と遊んだ記憶がある。その子は松君とよばれて、伊祐よりも為頼に大切にされて、乳母も為頼が姻戚の者から選んだのであるが、松君が五歳の時に為頼は死んでしまったのであった。為頼が死ぬと、伊祐はこの邸に戻って松君の面倒をよく見た。
そういえばこんな記憶がある。女房達が裁縫をしながら口さがない噂話に夢中になっていた。それを小耳にはさんだ賢子がばたばたと右京のところにかけこんで、
「ねえ、乳母、ゴラクインて何かしら」
はしゃいだ声でたずねた。すると右京の頬に血がのぼり、たちまち眼尻がつり上った。
「誰がそんなことを申したのですか」

「だって縫物所で聞いたのよ」
賢子はおびえて涙が出そうになった。
右京は軽はずみな裁縫女の失言に怒りを感じたらしいが、賢子の様子にあわてて、
「姫は何かの聞き違えをなさったのでしょう、御落涙といいませんでしたか」
「御落涙――ですって」
「そう、涙を流すことなのですけれど、ほら涙は嬉しい時にも悲しい時にもでるものでしょう」
「そうね」
「ですからきっと乳母などが、松君のお書きになった手習いの上手さに感激して涙を流したとか、そんなお話をしていたのですわ。姫君もみなに感心されるように、よくお手習いなさいませね」
などと上手に言いくるめられて、そのまま忘れてしまったのであった。
何年かして松君の元服式というのがこの邸で行なわれ、それは為時が主宰をした。元服式というのは、童形に長く伸ばしておいた少年の髪の毛を切って、頭の上に髷をつくり、それに冠をかぶせるのである。理髪が伊祐で為時が加冠をつとめたが、多くの人が集ってきた中に、賓客として村上天皇皇子の具平親王という方がみえた。その方を一同が緊張してお迎えした様子は、賢子の子供心にもよく残っているのである。
式のあとでは寝殿の方で賑やかな宴会があって、具平親王も為時も文学には才能のある人達だから、詩や和歌の遊びも行なわれた上に、管絃の音色が夜おそくまで邸内にはひびき渡った。中でも具平親王の琴の音色がさえていて、賢子のそばで臥していた母の式部が、自分もその音色をいちいち心に追うように、じっと耳をすませていたのを憶えている。夜に入っても人々は西の対から透き廊下を渡って釣殿にあふれ、ふけるまで酒をのんで楽しむ様子が、東の対屋からよくみえた。

翌日は裁縫所も元服式の話でもち切りで、
「親王様が御落涙されて、やはり親心ですわねえ」
と、袖ひき合いながら召使達が噂をしたが、この時は式部が賢子をよんで、改まった様子で言い聞かせた。
「松君は親王様の御子ですが、双方の希望で伊祐さまの御養子となっておられるから、それで西の対にお住まいなのです。でも元服なさって頼成君となられた以上はもう大人ですから、そのうち宮中に出仕されるようなことになるでしょう。あなたも今は子供らしい服装をしているけれども、やがては裳をつけて大人の仲間入りをする日も近いのですから、今までのように松君のあとから庭をかけ廻ったり、虫を捕えたりするのはおやめなさいね。男女七歳にして席を同じゅうせずというのに、あなたはもう八歳なのですから」
賢子はうなずいて聞いたが、何とつまらないことかとふくれ面を袖の下にかくしていたのであった。
だがその頼成君もまもなくよそに移ってしまった。右京の話では、頼成の血縁の姉君が、道長公の長男頼通殿の正室で、その方の希望で頼通邸に暮すようになったという。
二年前からは宮中の蔵人所に雑役としてつとめているらしい。賢子はその少年のことを思いだし、
「ね、右京、隠しても駄目よ。西の対のお客様というのは頼成の君でしょう」
と乳母の顔をのぞきこんだ。だが右京は、
「あまりお喋りをすると、奥様に叱られますから」
脇をむいてだまってしまった。
「やはりそうなのね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com